

京都大学	博士（人間健康科学）	氏 名	市 原 香 織
論文題目	Nursing care for spiritual pain in terminal cancer patients: A non-randomized controlled trial (終末期がん患者のスピリチュアルペインに対する看護ケア：非ランダム化比較試験)		
(論文内容の要旨)			
【背景】			
終末期がん患者の全人的苦痛の一側面であるスピリチュアルペイン（SP）は、死を意識することによる生きる意味や目的の喪失、衰弱による活動能力の低下や依存の増大、家族や周囲への負担、死の不安や孤独などの苦しみである。SPは多次元であり、国際的に統一された定義や標準的アプローチは存在しない。国内では、村田による現象学に基づく SP 概念枠組をもとに Spiritual Pain Assessment Sheet (SpiPas) が開発された。SpiPas を用いた看護師教育プログラム（2 日間）が実施され、その結果、看護師のスピリチュアルケア（SC）に対する自信や実践の自己評価が向上した。参考論文では、この教育プログラムの講師・ファシリテーターが、SpiPas を用いて SC を実践することで、進行がん患者の Spiritual Well-being（SWB）の維持や不安の軽減に役立つことが示唆された。本研究の目的は、緩和ケア病棟で勤務する看護師（病棟看護師）が日常のケアの中で SpiPas に基づく SC（SpiPas-based spiritual care program for nurses：SpiPas-SCP-N）を実践し、終末期がん患者の SWB への効果を評価することである。			
【方法】			
緩和ケア病棟 5 施設において非ランダム化比較試験を実施した。各施設の入院患者は最初に対照群（通常ケア）を登録し、目標数に達した後、病棟看護師が SpiPas-SCP-N の実践に向けたトレーニング（基礎知識、評価法、ケア立案等 90 分）を受け、新たに介入群（SpiPas-SCP-N）を登録した。主要評価項目は SWB を評価する Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual（FACIT-Sp）、副次評価項目は Hospital Anxiety and Depression Scale (HADS)、Comprehensive QOL Outcome (CoQoLo)、MD アンダーソン症状評価尺度 (MDASI-J) を用いた。解析には、交絡因子を調整するために傾向スコアマッチングを用い、ベースラインから 2 週間後の群間の変化量を比較した。			
【結果】			
入院患者は対照群 140 名、介入群 157 名に割り付けられ、それぞれ 97 名 (69.8%) と 106 名 (68.0%) が測定を完遂し、各群 73 名がマッチングされた。FACIT-Sp は、対照群では低下し、介入群では増加したが、統計的に有意差は見られなかった (95% CI, -3.98, 1.41, p = 0.347) 。一方、HADS は有意に低下した (95% CI, 0.15, 3.87, p = 0.035) 。FACIT-Sp の下位尺度である「生きる意味・平穏」と HADS の下位尺度である抑うつは、介入群で改善が見られたが有意差は得られなかった。CoQoLo と MDASI-J は有意差がなかった。			
【結論】			
SpiPas-SCP-N による SC は、終末期がん患者の SWB に対する効果が得られなかった。しかしながら、不安・抑うつは改善され、これらの症状は SWB と関連して			

いるため、終末期がん患者の Well-being に寄与する可能性が示唆された。今後の課題は、ランダム化比較試験の設計を含め、FACIT-Sp の「生きる意味・平穏」を主要評価項目とすること、また、多次元で個別性の高い SP に対する SC を実践するには、実践のスーパービジョンと継続的なトレーニングが必要である。 (論文審査の結果の要旨) 終末期がん患者のスピリチュアルペイン（SP）は、「自己の存在と意味の消滅から生じる苦痛」と定義され、その評価法として Spiritual Pain Assessment Sheet（SpiPas）が開発された。本論文は終末期がん患者に SpiPas-based spiritual care program for nurses（SCP-N）に基づくスピリチュアルケア（SC）を実践し、通常のケアとの比較を通じて患者の SWB に与える効果を評価した。緩和ケア病棟 5 施設において、最初に対照群（通常ケア）を登録し、SCP-N による看護師トレーニング後、新たに介入群（SCP-N）を登録した。傾向スコアマッチングを実施し、SWB（FACIT-Sp）、不安・抑うつ（HADS）、QOL（CoQoLo）、症状（MDASI-J）の介入前と 2 週間後の平均値の変化を比較した。マッチング後の各群 73 名の FACIT-Sp は、対照群では低下、介入群で増加したが、統計学的に有意差は見られなかった（95% CI, -3.98, 1.41, p = 0.347）。一方、HADS は有意に低下した（95% CI, 0.15, 3.87, p = 0.035）。CoQoLo と MDASI-J は有意差が見られなかった。 以上から、SCP-N による SC は、終末期がん患者の SWB に対する効果が得られなかったものの、対照群の設定や評価尺度の再考、トレーニングの改善により、効果が期待できる可能性がある。 したがって、本論文は博士（人間健康科学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、本学位授与申請者は、2024 年 2 月 14 日実施の論文内容とそれに関連した試問を受け、合格と認められたものである。			
要旨公開可能日：2025 年 3 月 1 日 以降			